硯心会書展だより

東京学芸大学書道科卒業生

第２号

平成26年7月発行

硯心会創立六〇周年記念展示

「歴代門標（学芸大学正門）の書」について

硯心会理事長　広瀬裕之

昨年、母校書道科同窓会硯心会も、創立六〇周年記念の年を迎えることができました。これもひとえに書道科草創期の先輩方をはじめ歴代の役員の方々のご尽力及び今日までの会員の皆様のご協力のお蔭と深く感謝申し上げます。その記念の年の硯心会書展にふさわしい展示として昨年、母校正門の歴代門標の書を企画いたしました。それぞれその時における書道科主任教授の先生方が渾身の力を込めて揮毫されたものです。どの期の会員にとってもそれぞれのなつかしい思い出があるこの「大きな横書きの木製の門標」はまさに母校学芸大の象徴の一つと言えましょう。

できれば実物が一つでも残っていたらお借りして展示しようと考え、噂では附属図書館地下倉庫にあるらしいとのことでしたのでまず同館で調べて頂きましたが判りませんでした。しかしいろいろな先輩方に過去の門標についてお伺いしつつ調査していくうちに、昔の写真だけではなく、なんと伊東先生の肉筆草稿が２種類現存することが判ったことが大きな収穫でした。

お蔭様でこれらを展示することができ、六〇年の長き歴史を振り返りつつ、これらを見ながらそれぞれの書道科時代の懐かしい思い出に花を咲かすことができました。

今回の調査により、正門の「横書き門標」は、田辺古邨先生揮毫のもの（昭和三八年頃～昭和四九）が一番古いことが判りました。二代目門標は、伊東先生揮毫のもの（昭和四九～昭和五七）であり、その揮毫に当たっては、縮小判の画仙紙に幾枚も揮毫（草稿１）をし、その後、実物大に貼り合わせた大きな画仙紙に揮毫（草稿２）されたことが判りました。まさに本番の檜材に揮毫する直前の草稿が現存していることが判明し、伊東先生の門標揮毫に当たっての周到な準備と意気込みを知ることができたのが圧巻でした。

三代目門標は、雄渾な吉田先生揮毫のもの（昭和五七～平成一一）です。今のところ正門の「横書き門標」では最も長い一七年間掲げられていたものであったことが判りました。現在の門標は四代目にあたり、平成一一年に大学創立五〇周年記念式典を迎えるにあたって加藤東陽先生が当時の学長から依頼されて書を揮毫し、そして村山臥龍先生によって刻字され完成されたもの（平成一一～現在）とのことです。

今回の横書きの「歴代門標（正門）」の実物の所在調査に当たって

は、書道科の先生方及び附属図書館・新しく開設された大学史資料室の多大なるご協力を頂いたことに深く感謝いたします。しかしどうしても所在が判らなかったことがとても残念でした。副学長であり同室長も兼ねておられる藤井健志先生が、お忙しい中、さらに古い写真が存在するのを見つけられ、その写真を持参されて炎天下、銀座での本書展会場までお越し頂けたのは、とてもうれしく感激した出来事の一つでした。これにより横書きになる前は、「縦書きの門標」が右側の門柱に掲げられていたことが新たに判りました。これもおそらく田辺先生が揮毫されたものと思われます。

昨年暮れに大学史資料室から正門門標について特集したいのでインタビューしたいとの依頼があり、長野秀章先生、石井健先生と私で、副学長室にお伺いしました。その時、お話したことなどが『大学史資料室報』vol1に鈴木明哲先生によって「門標の変遷」として掲載されました。(東京学芸大学のホームページを開き、大学史資料室をクリックして入ると同誌が掲載されています。)詳しくは同誌をご覧ください。

硯心会も今年六三期の卒業生を会員としてお迎えしました。母校書道科のますますのご発展と会員の皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

隔年発行の「硯心会書展だより」第二号ができました。ご執筆頂いた各展の先生方及び編集担当の杉山先生に感謝いたします。本年から硯心会会長は、加藤東陽先生から栗原重博先生にバトンタッチされました。今後とも会員一同協力し合い、共に頑張っていきましょう。

第３２回硯心会書展より

伊東参州先生揮毫の「東京学芸大学」門標原稿

第三二回・硯心会書展のご報告

硯心会書展部　殿村美奈子(三三期)

昨年の硯心会書展は、東京学芸大学書道科同窓会である硯心会創立六〇年の記念展となりました。去る平成二五年七月一九日から二二日まで「銀座洋協ホール」にて開催されました。

会場には、記念展として大学の象徴でもある歴代門標に関する資料を展示しました。お蔭様で先輩の皆様からは門標の展示の前で懐かしい学生時代のお話や心温まるエピソードなど伺うことができました。嬉々として熱く語られている光景に、先輩の皆様から硯心会の歴史を受け継いでいく責任と使命の重さを感じました。

今回展は、第三期から六一期までの八七名の会員の皆様からの多種多様な作風の書作品をご出品いただきました。東京銀座という利便性も合わせて首都圏はもとより、日本全国からのご出品と、総会、懇親会とご出席賜り心より御礼申し上げます。回を重ねるごとに新しい期の会員の出品数の増加は喜ばしく、世代を超えて新たな交流の輪が広がり、さらなる発展に繋がることでしょう。

また硯心会書展の特徴は、様々な視点からの趣向を凝らした企画展にあると言えるでしょう。毎回、ご来場いただいた皆様からも大好評で、作品と合わせてお楽しみいただいております。

本年は、蘭亭における流觴曲水の宴を描いた「蘭亭脩禊図巻」(拓本・巻子本)を展示いたします。

今後とも、会員の皆様のニーズにお応えできるような企画展も取り入れて参りたいと存じます。

本会も昨年、還暦を迎えました。また、初心に立ち返り、これからも会員の皆様の作品発表と研鑽の場として、硯心会書展を盛り上げていけるよう、役員一同一丸となり活動して参る所存です。

何卒、ご支援ご協力のほどお願い申し上げます。

第三二回硯心会書展・会場風景

千葉硯心会書展のご報告

千葉硯心会事務局　石井昭正（三一期）

平成二三年度に四〇回の節目を迎えた千葉硯心会書展。本会は原則、千葉県在住・在勤の東京学芸大学書道科出身者が会員で、会員数は一五〇名以上。年に一度の展覧会には三分の一程度の会員が毎年出品しています。

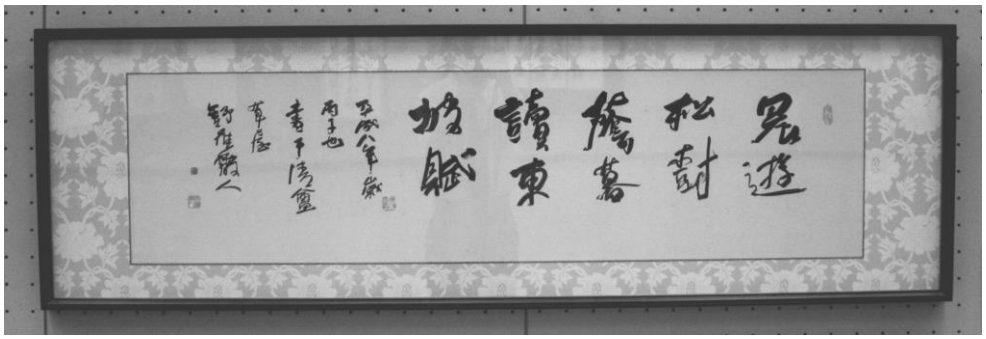
平成二四年度は八月七日～一二日、第四一回展として、千葉県立美術館で開催されました。浅見錦龍先生の賛助作品、揚石舒雁先生の遺作を含め、四七点の作品が展示されました。

平成二五年度は七月二五日～三〇日、例年より若干時期を早めての開催となりました。千葉県立美術館改装工事に伴い、第四二回展は市川文化会館での展示発表となりましたが、四三点の作品を展示することができました。当館展示室は壁面も広く、鑑賞スペースもゆったりとしており、大作の鑑賞にもたえうる造りになっています。例年以上の力作・大作が多かったようです。

本年度、第四三回展も市川文化会館での開催となります。日程は、八月五日～一〇日です。ご高覧・ご批評賜れば幸甚でございます。よろしくお願い申しあげます。

第四一回展
浅見錦龍先生　賛助出品

第四一回展　会場風景



第四二回展
故　揚石舒雁先生　遺作

千葉硯心会書展　第四二回展　会場風景

埼玉硯心会書作展について

埼玉硯心会　●〇〇〇

私たち埼玉硯心会は昭和五一年五月に名誉教授の吉田鷹村先生に顧問をお願いし、東京学芸大学書道科の卒業生で、埼玉県在住・在勤の有志により創設され、三九年目になります。現在では、七期から六〇期の卒業生五九名が会員登録し、一月に小品展覧会、八月には埼玉硯心会書作展を実施してきました。小品展覧会は諸般の事情により第一二回で中止になりましたが、毎年八月に実施されている埼玉硯心会書作展は今年度で三八回になります。

また、埼玉硯心会は一流一派に偏することなく、「真に書を志す書作家集団」として研究会、見学会、展覧会を実施し、研究研鑽を深めています。

近年の埼玉会館で実施される展覧会では、中央や在野で書作家として活躍する会員から、小・中・高・大学等で教鞭を執る会員、主婦業や民間企業等で定年退職を迎えた会員等々が多様な経歴・生活環境の中で作品を制作し、展覧会には四～五メートルを超える大作から小品まで、形式・書風ともに変化に富んだ作品（例年八〇点程度）が出品され、参観者には毎回好評を博しています。

これらの活動は、一朝一夕にできるものではなく、多くの紆余曲折があります。強力なリーダーシップを発揮する諸先輩方や、それ

を続けようとする多くの真摯な会員の行動力があったことは言うまでもありません。

埼玉硯心会《今年度事業計画》

第一回　五月一一日（日）　総会・研究会
第二回　六月一五日（日）　展覧会打ち合わせ・作品研究会
第三回　七月六日（日）　宛名書き・打ちあわせ・作品研究会
見学会　一一月初旬予定

第三八回　埼玉硯心会書作展

一般公開

平成二六年八月二日（土）午後一時から午後五時まで
八月三日（日）午前一〇時から午後五時まで
八月四日（月）午前一〇時から午後五時まで
八月五日（火）午前一〇時から午後四時まで

会場　埼玉会館第三展示室　ＪＲ浦和駅西口下車徒歩五分

皆様のご来場を心からお待ちしています。

埼玉硯心会書作展（第三七回展）・会場風景

第一一回群馬硯心会書展のご報告

杉山勇人（五〇期）

群馬硯心会書展は、群馬県在住・出身の東京学芸大学書道科卒業生有志が集まり、これまで二年に一度の開催を続けております。昨年は、平成二五年一〇月一二日(土)から一四日(月・祝)まで、前橋市民文化会館・小展示室で開催致しました。前回展（平成二三年度）は、一〇回記念展のため、高崎市シティーギャラリーの大会場で開催しましたが、今回は通常通りに戻し、前橋市民文化会館での開催となりました。

本展の出品者は、真下京子（群馬硯心会会長）・小倉釣雲（事務局長）・佐藤一墨子・下谷洋子・計良袖石・杉山勇人・永田灌櫻・清水亮輔の八名です。そもそも群馬県出身者が少ないということもありまして、出品者の数は限られております。しかしながら群馬硯心会書展は、出品作家それぞれの個性の幅が広く、漢字・仮名・前衛・篆刻・漢字仮名交じり文などあらゆるジャンルの作風が一堂に会することができる特徴があります。一〇月一二日にはギャラリートーク・懇親会が開催されました。出品作家による作品解説と来場者からの質疑応答があり、貴重な意見交換の場となります。同じ大学を卒業した者だからこそ会派を超えて、忌憚のない意見を交わすことができる機会であると思います。

出品者数は限られておりますが、今後も精力的に活動を継続していきたいと考えております。

第一一回群馬硯心会書展・会場風景

【大学書道分野より】

昭和六〇年より三〇年に及ぶ長きにわたり、東京学芸大学書道科にご奉職され、多くの卒業生を世に送り出すとともに、文部科学省教科調査官を併任され日本の書写書道教育のためにご尽力なさいました長野秀章先生が、今年度をもちまして定年退職されることとなりました。硯心会として、まずは心からの御礼と御祝を申し上げます。

つきましては、ご勤務最終年度となります今年度中に一連の退職記念行事が計画されているとのご報告を硯心会事務局にいただきました。硯心会としましても、できるだけのサポートをしてまいりたいと存じます。以下、大学行事もまじえて今後の関連行事予定をご紹介・ご案内申し上げます。

◆退職記念展(学内)
日時　平成二七年二月二七日(金)～三月三日(火)
会場　東京学芸大学芸術館
※先生が学生時代に当時の先生から添削を受けられた作品、学外での発表作品、先生の所蔵作品等を展示します。

◆最終講義
日時　平成二七年二月二八日(土)午後
会場　東京学芸大学芸術館・学芸の森ホール
※最終講義後、学内でお祝いの会を予定しています。

◆退職記念展(学外)
日時　平成二七年三月三一日(火)～四月五日(日)
会場　東京銀座画廊美術館
※先生の近作を中心に展示します。
※卒業生との懇親会〈卒業生企画〉
平成二七年四月四日(土)(予定)

硯心会書展だより・第二号　平成二六年七月二四日発行
編集・硯心会書展事務局

▽「硯心会書展だより」はこれから隔年で発行されることになりました。ご協力いただきました皆様には心より御礼申し上げます。本年度は関東からのお便りをいただきましたが、硯心会会員の皆様は全国にいらっしゃいます。皆様のご活躍をお伝えできましたら幸いです。ご一報をお待ちしております。

※第三号は、平成二八年七月に発行予定です。